2023年度大会講演会(愛媛大学)シンポジウムに寄せて

ウェルビーイングとこれからの農山漁村
―自ら選んだ道に進めるために―

(公社)農業農村工学会
ウェルビーイングプロジェクトチーム
座長　宮崎雅夫(元農林水産大臣政務官)

伊根の舟屋　未来に残したい漁業漁村の歴史文化財産

2023年8月30日

Version 1

Part１ 2050年の社会が想像できますか?

未来社会を展望し、困難だが実現すれば大きなインパクトが期待される社会課題等を対象として、人々を魅了する野心的な目標（ムーンショット目標）及び構想を内閣府が定め、推進している研究です。こんな世界が早く実現できるといいですね。これらの目標はSDGsはもとより、**ウェルビーイング**に大きく貢献する課題です。

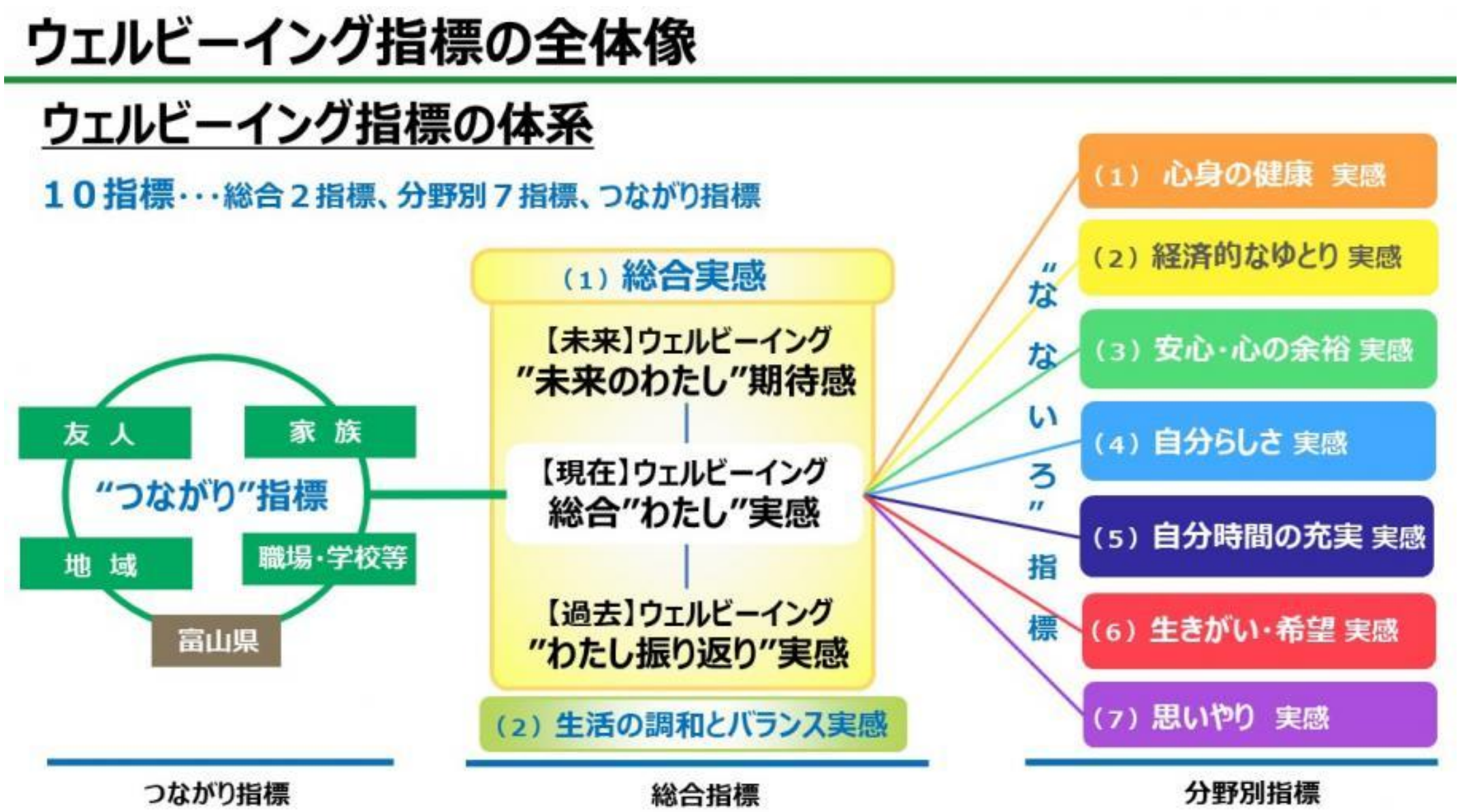
MOONSHOT
RESEARCH & DEVELOPMENT PROGRAM

SDGsとは

Part２ この目標に向けて今、プロジェクトチームとして取り組んでいること

ムーンショット研究が実現しても、これからを生きる私達にとって大切なことがあります。それは、多様な人・物、環境の中で、人々が自らこれからの人生を選べる社会を作るには、正確な情報とその基礎となる社会がサポートできることが必要です。それが、ウェルビーイングな社会をつくることになると考えています。

ウェルビーイングな社会の実現には、五感で豊かさを感じられ、様々な体験と選択肢が得られる農山漁村の実現が、「自ら選んだ道に進めるための社会」に通じると考えています。



内閣府「満足度・生活の質に関する調査」

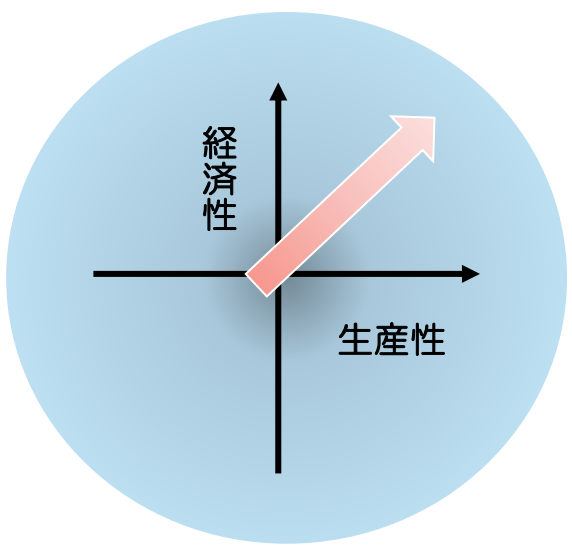
富山県ウェルビーイング指標

ウェルビーイングの定義は、いくつかありますが、基本は、人々の長い人生、生活の中で、その時々に多様な選択肢がある営みといえます。「食・農山漁村・土地改良は未来への礎」が当面の取組ですが、ウェルビーイングな農山漁村は、さらに先を見通した、日本のあるべき姿と考えています。

(1)ウェルビーイングな農山漁村の実現に向けて、まず社会の意識改革が必要

高度経済成長は、物的に豊かな社会をもたらす一方、外部サービスに依存する生活様式を広め、「かせぎ」を過度に重視する社会をもたらしたのではないでしょうか。そこで、様々な働き方改革が行われていますが、今、必要なことは「価値観を変える多様な評価軸の形成」による社会の意識改革と考えています。

人生は100年時代、多くの経験を活かし、リセットして3度生きる人生、転職・起業のために学びなおしができる人生、多様なコミュニケーションの場がある人生、それが必要です。



土日文壇、稼ぎ主体の行動様式

2023年8月

日	月	火	水	木	金	土
		1	2	3	4	5
6	7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26
27	28	29	30	31		

行動 Aパターン

土日中心のライフスタイルが新たな価値観を生む

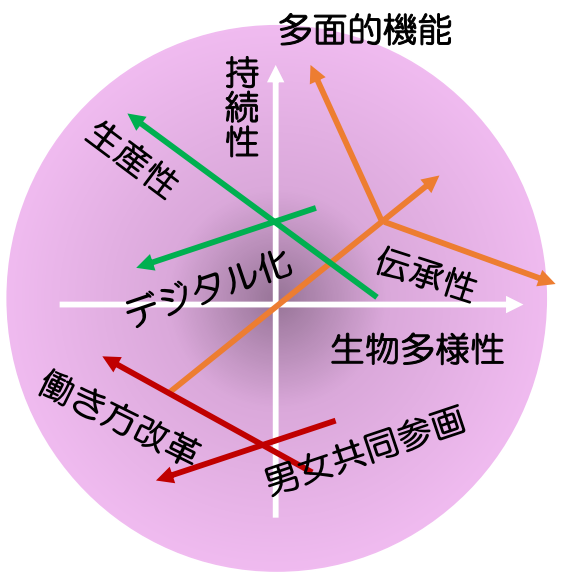
2023年8月

水	木	金	土	日	月	火
						1
2	3	4	5	6	7	8
9	10	11	12	13	14	15
16	17	18	19	20	21	22
23	24	25	26	27	28	29
30	31					

行動 Xパターン

行動 Yパターン

行動 Zパターン



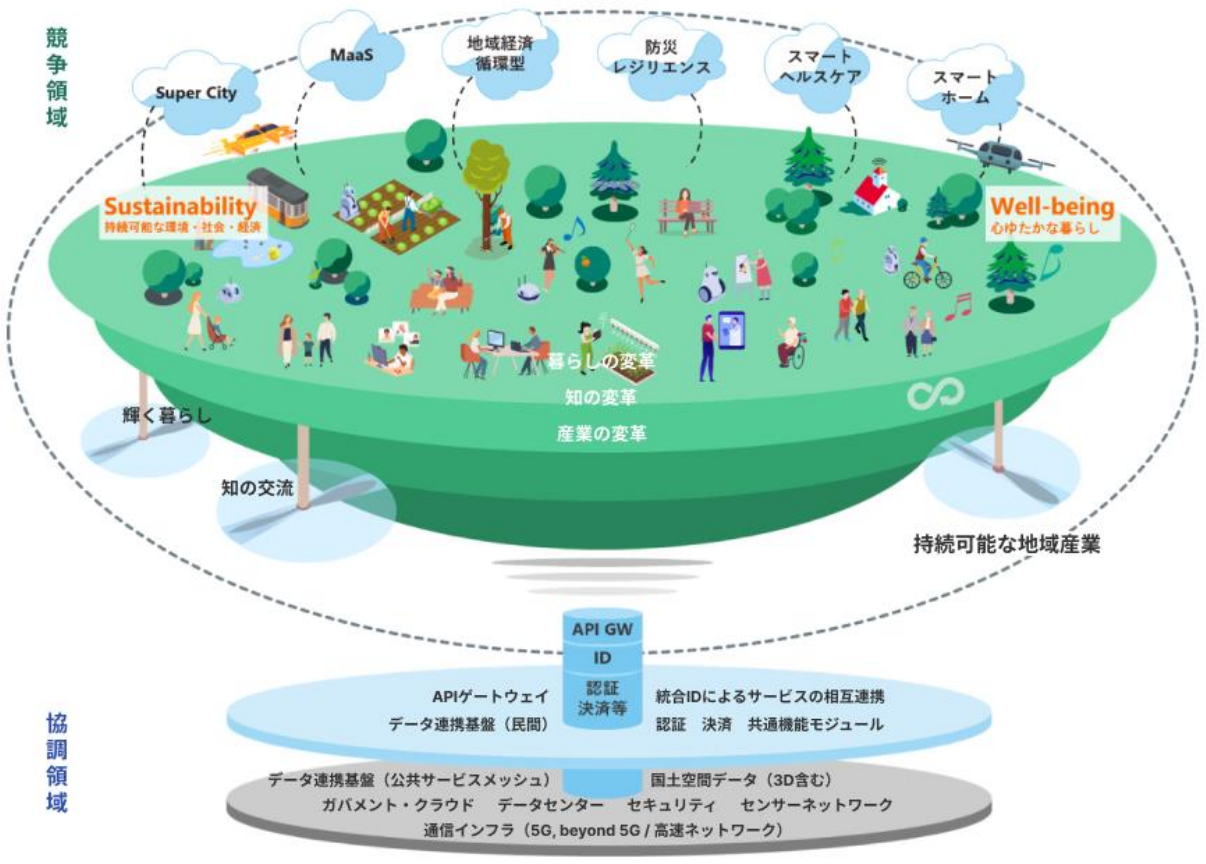
(2)多様な交流対策

①情報通信環境の整備による多様な人々の交流の場

人口減少対策には、児童手当や育児休暇など働く環境の改善も重要ですが、伝統文化の発信、交流人口、ワーケーション、農泊、CSAなど多様な人々の交流の場を作るには、情報過疎とならないよう情報通信環境の整備が不可欠です。

未来への選択

デジタル田園都市国家構想

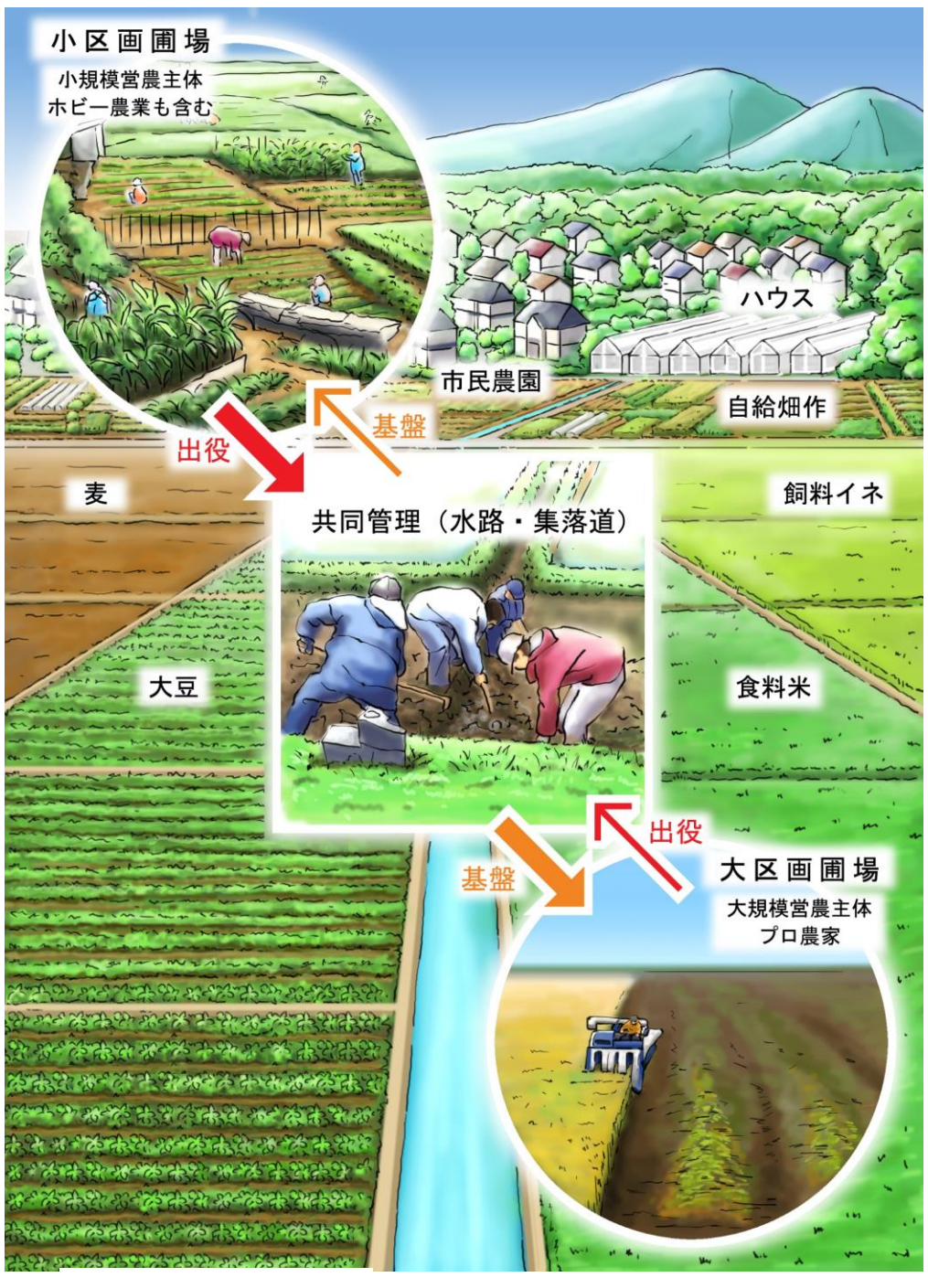


②男女が共同参画して営む農山漁村

少子高齢社会は、これまでのように男性だけが社会を支える仕組みでは維持できません。老若男女の共同参画で社会を支える以外に、日本の将来は考えられません。男女共同参画を進めるには、何よりもワーク・ライフ・バランスが前提になりますが、前記したように社会の意識改革が大切です。そして、多様な人材（ダイバーシティ）が互いに尊重され、それぞれが能力を発揮できている状態を示す社会における**インクルージョンを実現することが目標です。**そのうえで、生産性を高めつつ男女で効率よく働き、ともに家庭・地域に責任をもつ仕組みが必要です。

重要なことは、農山漁村は、一つの営みが、成長を見守る、収穫する、教える、体験する、感動するというような五感で感じることができる多様な機能を持っていることです。

このような機能を持つ農山漁村こそ、男女共同参画の一つ一つの活動が都市では味わえないより高い相乗効果を体感できる地域であると思います。

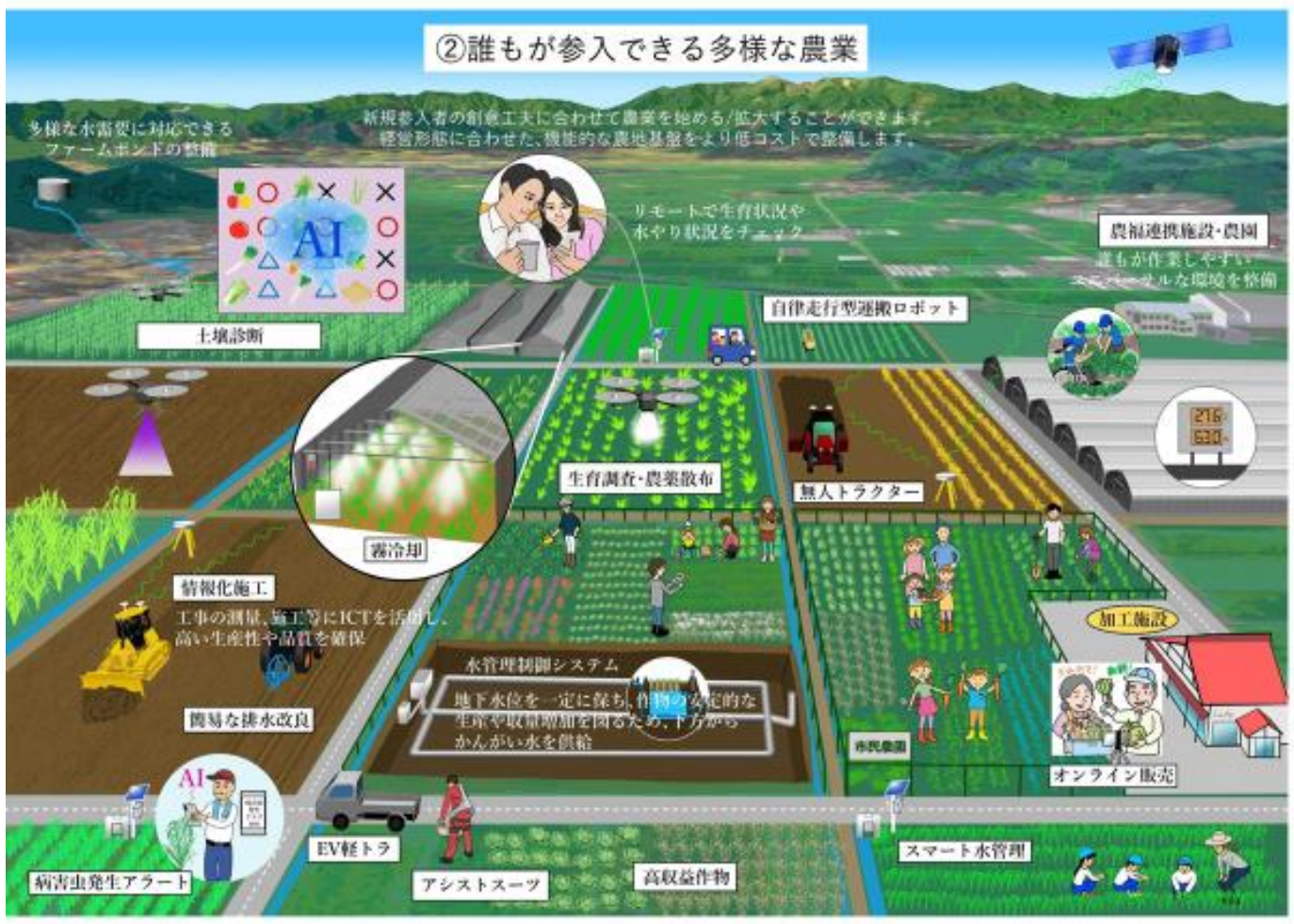


ICTによる
インクルージョン
促進:総務省

（3）自ら食料を育める社会

①誰もが参画できる農林水産業

食料を作ることは、その成長を見ることも大きな楽しみです。その楽しみを得たい人々、それは若者、女性、異業種の企業等が農林水産業の担い手として活躍できることが大切です。技術習熟度、経営形態、品目等に応じ、多様で機能的な基盤が低コストで整備されている、そんな農山漁村を実現します。AIにより自動化されているなど、就業経験が少なくとも参画できるインフラ面でのサポートが充実しているほか、高齢者や障害者も能力に応じた作業が可能となるユニバーサルな営農環境を目指しています。



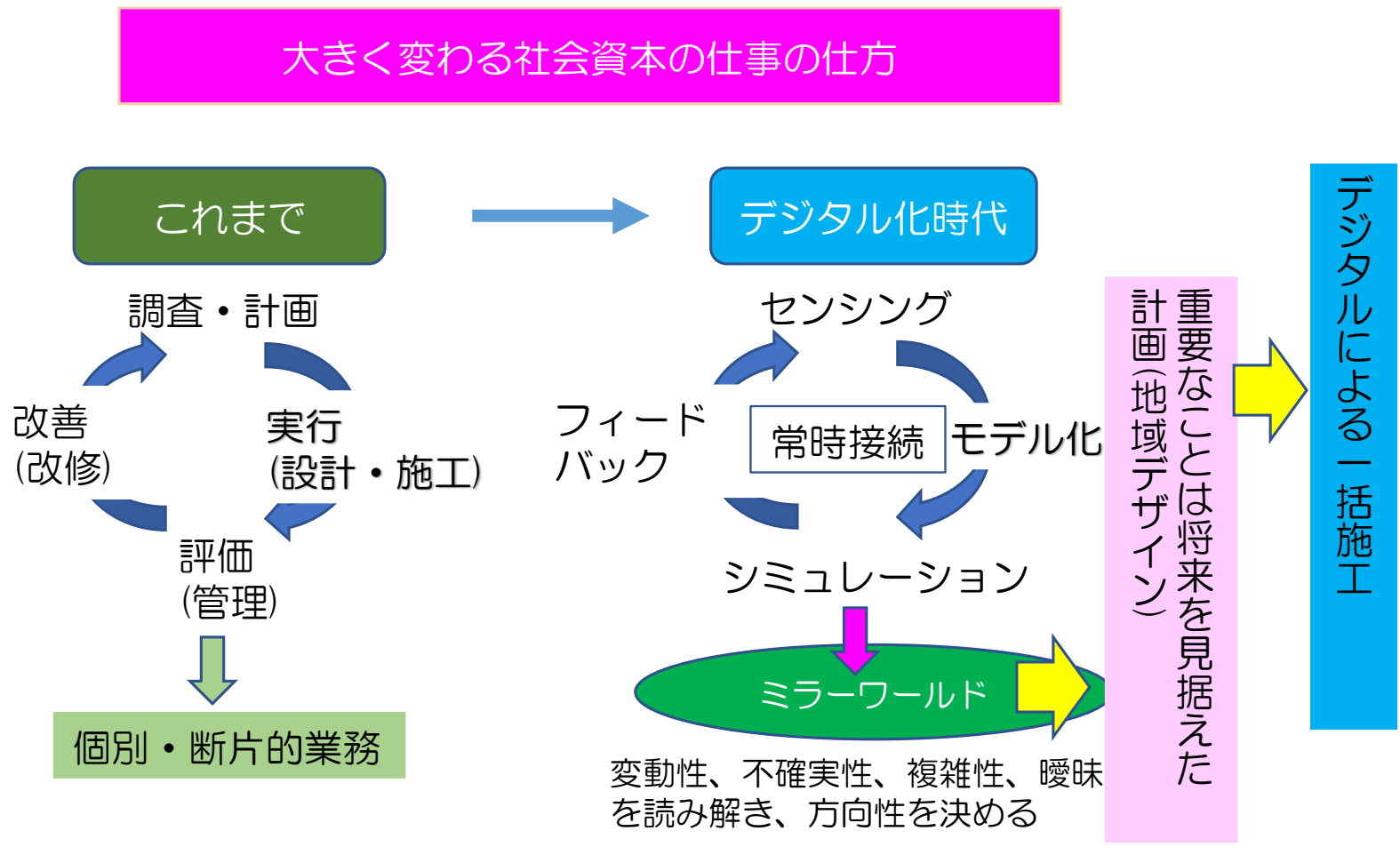
ICTを活用した農業用水のスマート水管理システム

②農林水産業のDX

農林水産業に限らず、さまざま業界でDXが叫ばれています。日本の農林水産業では、高齢化や人手・後継者不足、需要把握不足による過剰生産と廃棄、豪雨などの災害への対応の遅れによる被害拡大、輸入品との価格競争といった課題を抱えています。

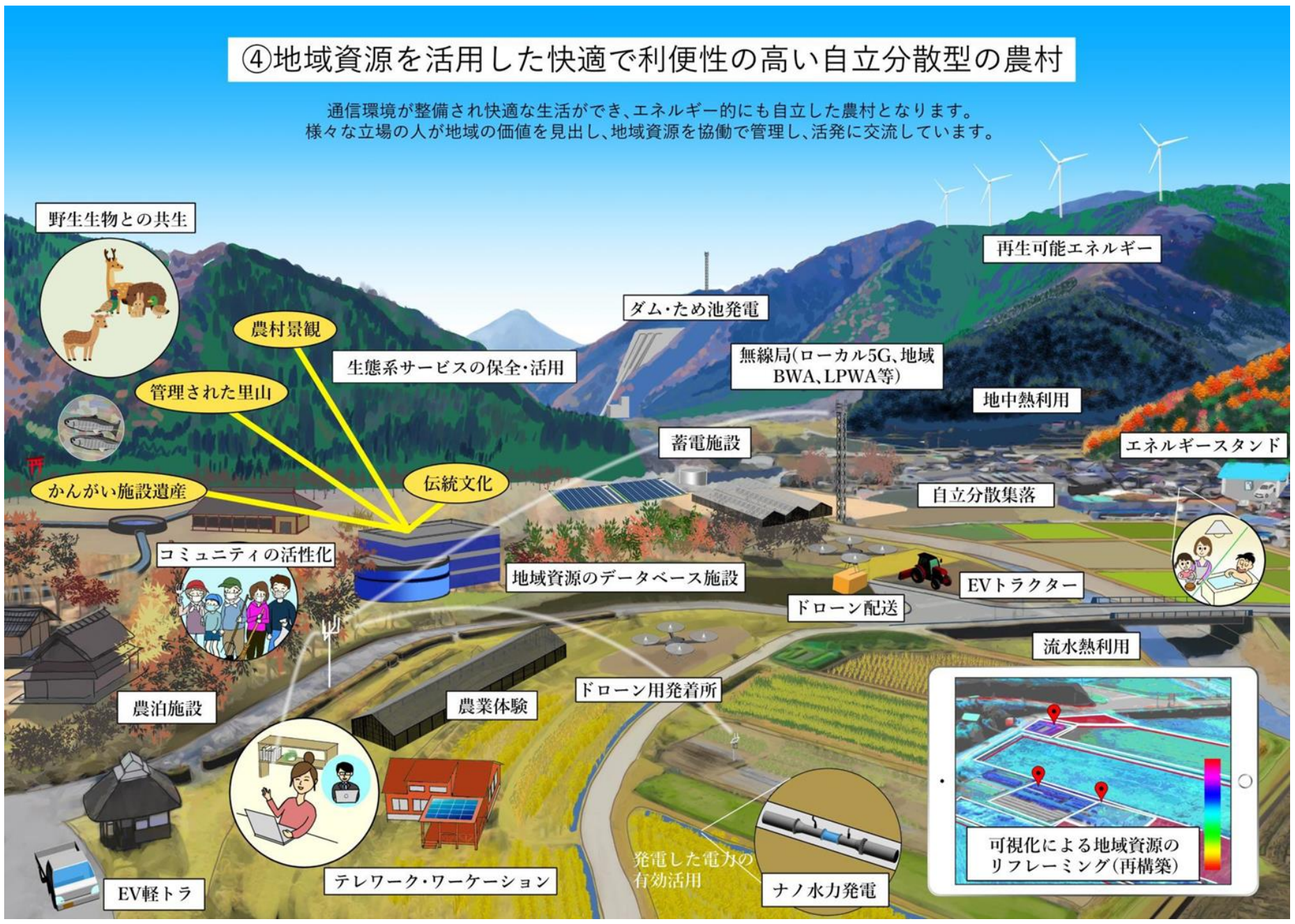
農業DXを実現できれば、これまで断片的であった情報から常態監視による的確で効率的な予測・予防が実現できると期待されています。スマート農業もこのDXに含まれています。

「農業DX構想」
農林水産省



③地域資源を活用した次世代農業生産

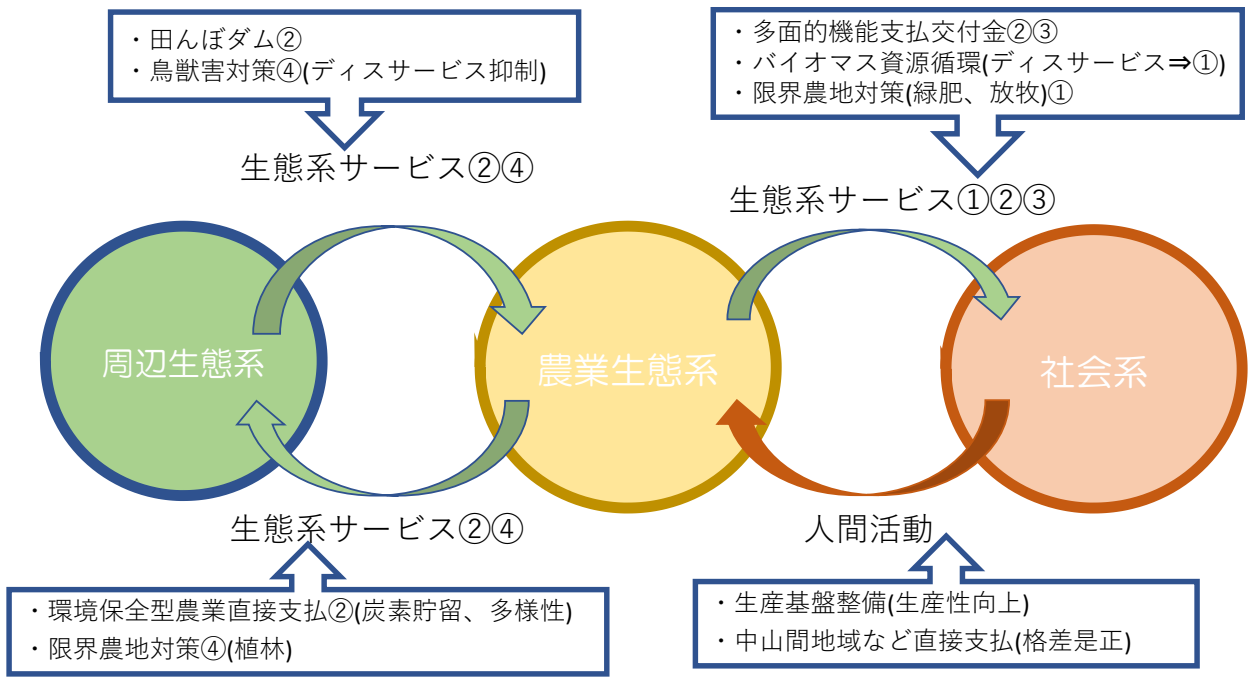
化学肥料に含まれるリンは、通常リン鉱石を利用してつくられています。我が国は全て輸入に頼っています。近年ではリン資源の枯渇が心配されており、価格が高騰して手に入りにくい状況になりつつあります。そこで、使われなかった資源を回収し、再利用する研究が進められています。また、これまで電力を消費する側であった農業水利施設が、水の持つエネルギーをフル活用することにより電力を作り出す側に変わるなど、水力、風力、太陽光、バイオマス等のあらゆる資源を利用した発電等により再生可能エネルギーが自給され、地域資源を活用した農村の自立が可能となっています。地域にある資源の再有効活用こそが、次世代型農業の姿と言えます。



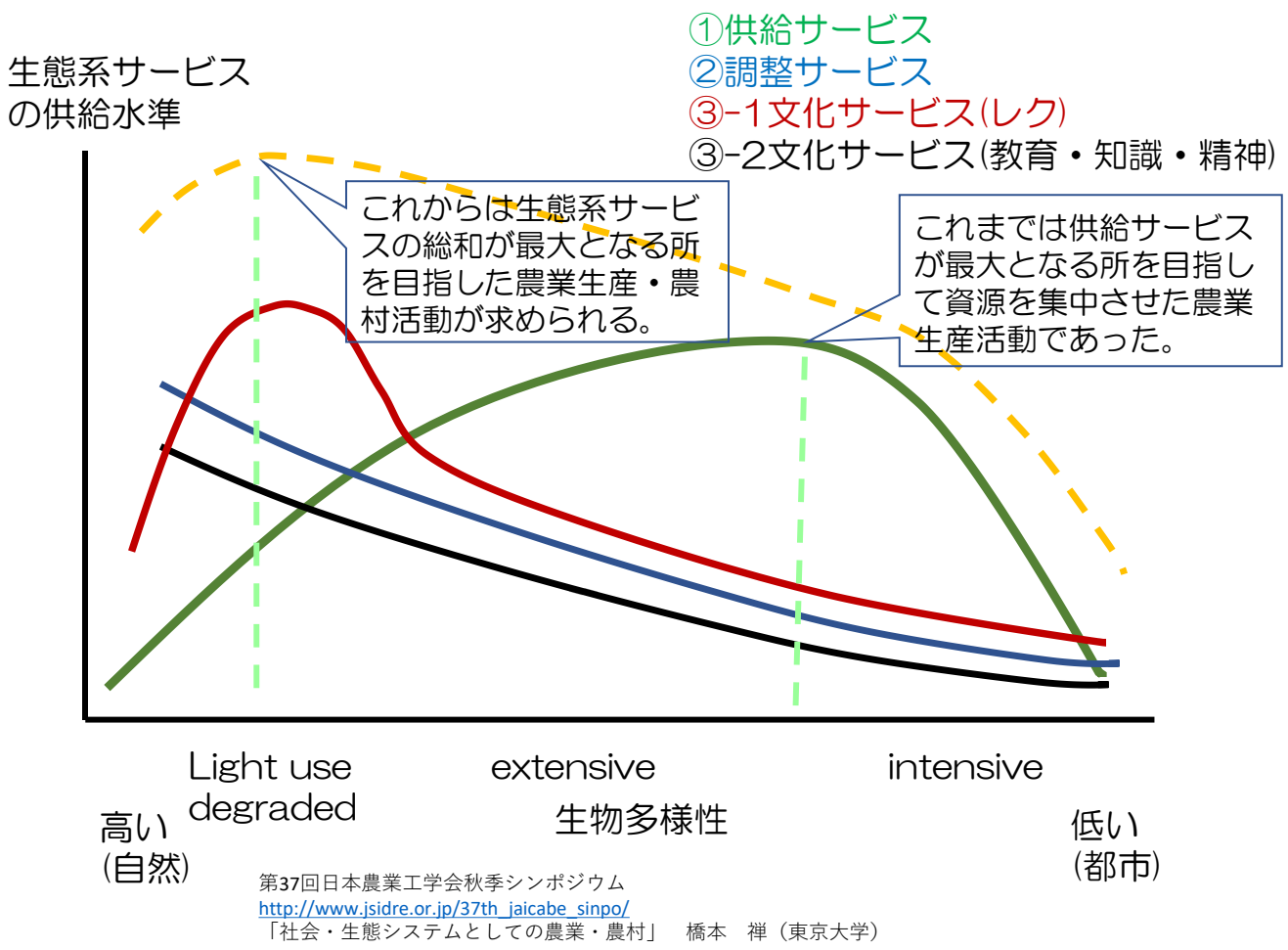
（４）安心して、享受できる農山漁村づくり

①多様な生物の活動を保全する

　都市化により日常の自然体験が減少すると健康、感情、態度、行動に影響する、特に子供たちは自然環境との接触の減少が発達に悪影響を及ぼすとされています。
　これまで生態系サービスの恩恵を意識していなかった私たちは、その恩恵を再認識し、農山漁村の生態系サービスを維持保全することが必要です。



社会・生態システムにおける農業生産と農業農村整備の位置づけ



第37回日本農業工学会秋季シンポジウム
http://www.jsidre.or.jp/37th_jaicabe_sinpo/
「社会・生態システムとしての農業・農村」　橋本　禅（東京大学）

　これまでややもすると、生産性を最大限発揮するところを狙って活動を行ってきましたが、持続性、SDGsを考えると生態系保全を考慮した生産活動が必要です。そのための技術開発と政策を追求していきます。

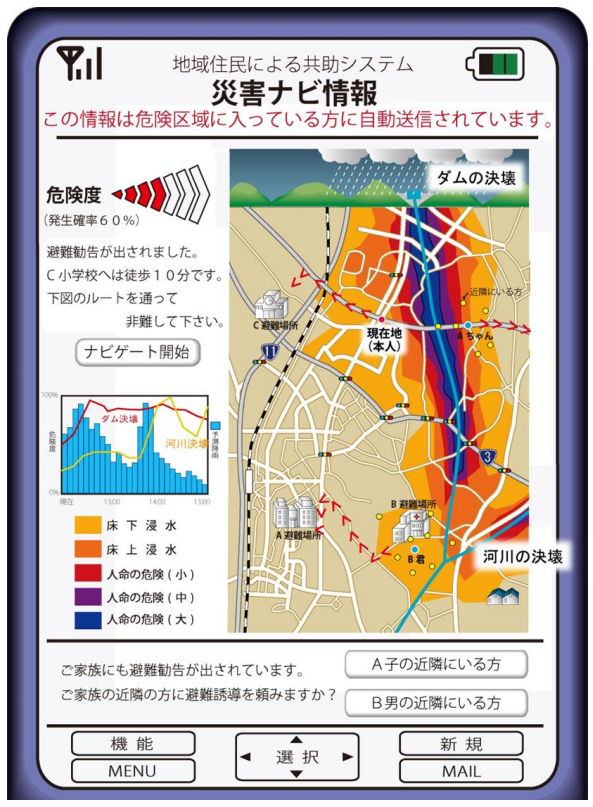
ネイチャーポジティブ経済の実現に向けて
環境省

新たな農林水産省
生物多様性戦略

②激甚化・突発する災害から自らで守れる農山漁村

　避難勧告を待っていては、守れない生活があります。行政の情報を、より早く、より正確に把握し、自分の場所、家族、周辺の状況から自ら率先して、自らを守れることが大切です。
　そのためには、普段からの防災対策、リスクマネジメントなど地域の人々が安心して生活できる地域づくりが大切で、そのための取組を進めています。

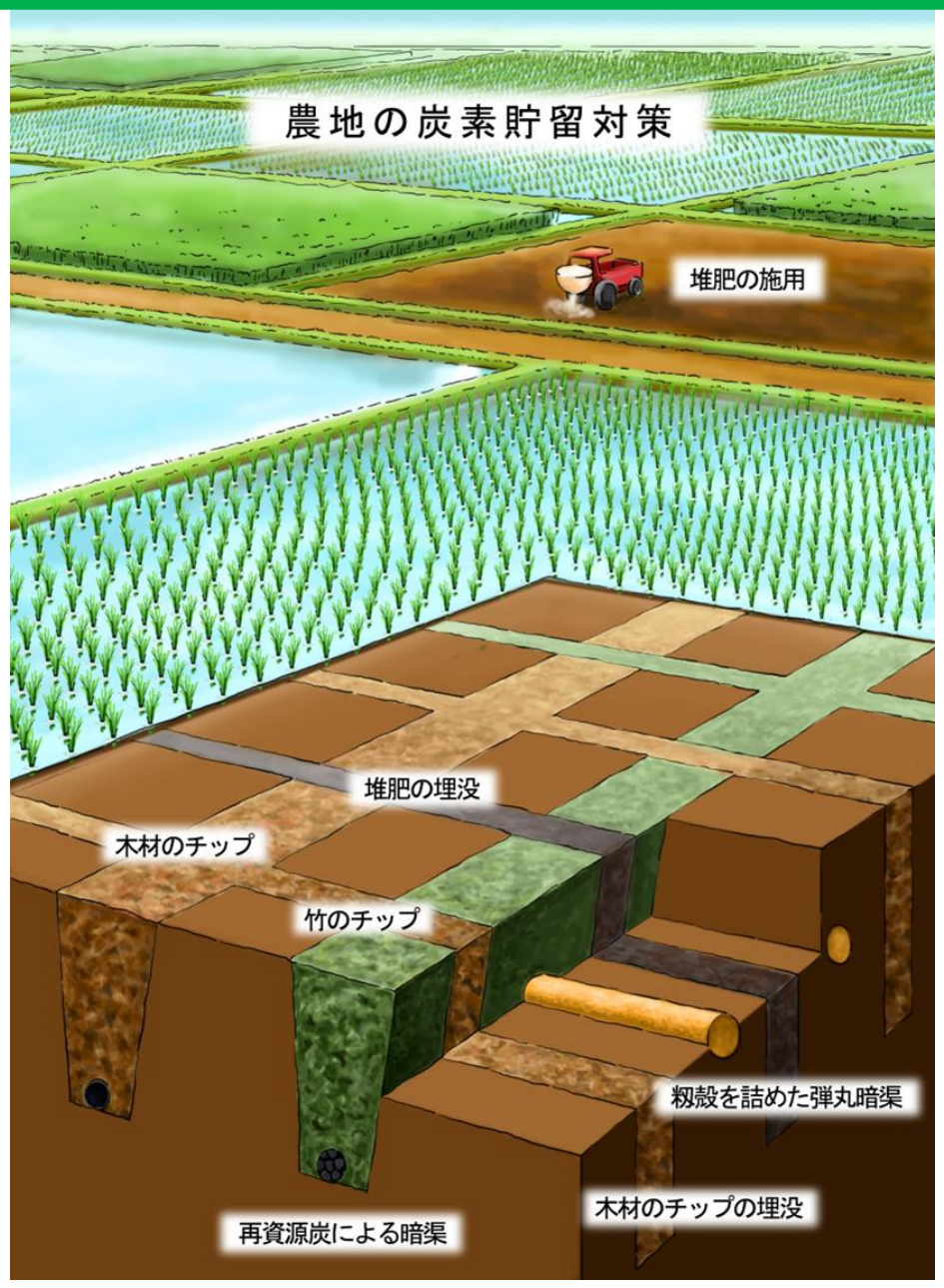
内閣府PRISM成果
ため池強靭化＆
流域治水



③炭素を農業で活用する社会

農業は温室効果ガスを排出する一方で、日本の農林業では新たな削減策がたくさんあります。その一つが農地の炭素貯留です。農林業で発生する堆肥や作物残渣、間伐残材などの大量の有機物が放棄や焼却など不適切に処理され、温暖化対策に逆行する現実があります。

二酸化炭素吸収源炭素対策は、取組む農業者に対して排出権取引や事業促進の支援制度などにより経営を強化し、農業を中核に林業や土木業などの連携を図って地域産業を活性化する地球環境保全産業として展開するでしょう。



農地の炭素貯留

J－クレジット（バイオ炭の農地施用）

Part３ 最も大切に考えていること
多様な「コミュニケーション」の創造と人づくり

ウェルビーイングな社会(選択肢のある生活)を作るためには、**多様な考え方を持つ人々が、認め合い、理解しあえる社会。スピンオフができる社会です。そのためには若者が五感で体験し、正確に情報を得て、自ら判断し、多様な取組ができる人材の育成が大切です。**生成AIが問題提起される中、五感を伴う体験(学び)がコミュニケーションづくりにとって大切であり、それをこのプロジェクトチームは目指しています。

農村景観の形成を契機とした地域づくり

日本の小さな田舎が世界一輝くプロジェクト！

Facebook

編集:(公社)農業農村工学会
ウェルビーイングプロジェクトチーム

座長 宮崎雅夫	副座長 奥田透	副座長 小前隆美